

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 准教授

氏名 鈴木武人

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

獣医学部獣医学科、獣医保健看護学科および動物応用科学科において、必須科目である動物栄養学I・IIを中心とした教育と動物栄養学に関する研究活動を行っている。主たる教育活動は動物の栄養に関する科目（科目表参照）の担当、研究室所属学生の研究指導である（添付資料1）。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	128
牧場実習	獣医学科	必修	2	136
獣医畜産管理学	獣医学科	選択	3	146
獣医学特論II	獣医学科	必修	6	2
卒業論文	獣医学科	必修	6	2
動物栄養学I	獣医保健看護学科	必修	2	74
動物栄養学II	獣医保健看護学科	必修	2	74
動物生化学実習	動物応用科学科	必修	2	150
動物栄養学実習	動物応用科学科	選択	4	13
栄養化学	動物応用科学科	必修	2	147
動物生命科学実習	動物応用科学科	必修	1	140
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

私が担当する科目群は、口から入った食物がどのように利用されて、生命をどのように維持するのかを学ぶ科目が中心であり、栄養素の機能や体内での代謝といった生化学・栄養学についての知識修得と理解を目指している。さらに、栄養素が代謝をコントロールするといった生命のダイナミズムも感じてもらい、栄養に関する知的好奇心を引き出したいと考えている。また、学生には各科目内で学修が完結するのではなく、科目間の連携を学生自身が構築できるような授業展開を目指している。これは、ただ知っているだけの知識から、使いこなせる知識への変換を意味し、その能力を備えることで、大学での学びを深めるだけでなく、問題解決能力の向上につながると考えているからである。その様な能力を備えた社会で通用する学生を育成することも重要な使命であると感じている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

・自身がコーディネーターを担当している講義科目では、知識の定着のために講義内容を確認する小テスト（正誤問題あるいは五者択一問題を5問程度）を実施している（添付資料2）。1回の講義内容が比較的少ない1単位の科目では、講義の最後の5分で当日の内容に関する小テストを実施し、翌週の冒頭で前週の復習（要点の振り返り）と小テストの正答提示・解説を行っている。この小テストと翌週の復習により、重要な事項は2度繰り返されることとなり、知識の定着が促進されるとともに、学生の理解度の把握にも役立っている（添付資料3）。また、小テストの答え合わせを実施当日にせず、疑問点や不明点の確認を促すことで復習の動機付けを行っている。一方、1回の講義内容が多い2単位の科目では、小テストを翌週の講義初めに実施し、解答終了後すぐに解説することになっている。情報量が多い分、復習による内容整理と理解が重要になるため、翌週の小テストにより復習の動機付けを行うとともに、理解度の把握に役立っている。

・生化学や栄養学では化学の知識と理解が必要とされる場面が多々ある。その一方で、本学のような生物系の学科では化学に苦手意識を持つ学生が多く、特に生化学系の科目は再履修者が多い傾向にある。その苦手意識の克服と理解を容易にするために、化学構造や化学反応の詳細を説明する前に、大枠を平易な言葉で説明（炭素は手が四つある、手が余っていると不安になるetc.）するよう心がけている（添付資料4）。

・学生の理解を深め、正しい知識を定着させるために、講義資料に曖昧な表現を用いないよう配慮している。例えば「AがBを活性化する」というような当たり前を使用する表現であっても、「Aが受容体に結合することによってCタンパクが遊離し、Cタンパクが酵素Bに結合すると、酵素の構造が変化して酵素活性が高まる。」というように補足を加えたり、図示したりして、物事の仕組みや流れを理解してもらえよう工夫している（添付資料4）。

・講義時間に対して講義内容詰め込みすぎないことも、理解促進に重要だと考えている。教員側からはあれもこれもと内容を詰め込みがちになるが、私の担当している科目は低学年の基礎となる科目が多いことから、より重要な項目については基本的な事柄に絞ってゆとりを持った講義展開とし、聞き漏らしによる理解度低下を防ぐよう配慮している（添付資料5）。

・本学部は動物を対象とした学びが中心となっているが、生化学や栄養学では動物で共通する部分も多いため、自分（人間）ではどうなのかという例を示すことで、より身近な現象として代謝や栄養を実感できるよう例示することを心がけている（添付資料4）。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

動物栄養学実習では飼料の栄養成分分析を主に扱っているが、実習項目ごと（実習2～3回に1回程度）に得られた結果の妥当性や飼料の種類による違いなどについて、班単位で教員とディスカッションする機会を設けている。この科目は選択科目かつ4年次配当なので履修者は少ないが、内容に興味を持った意欲の高い学生が履修していることもあって、教員との対話が考察をより深める機会となっており、その点は授業アンケートでも学生から評価されている。

(2) ICTの教育活用

有

AzaMoodleの小テスト機能を用いることで、採点結果と簡単な解説を回答送信後にすぐに確認でき、どの項目を重点的に復習すべきかの指標として活用できるように配慮している。また、講義は毎回録画し、講義後1時間以内にはAzaMoodleにアップロードしている。講義動画を速やかに提供することで、聞き逃しの確認やノート整理など復習の機会を逃さないよう配慮している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

講義終了時の小テストについては、授業評価で「役に立った」、「理解が深まった」と一定の評価を受けており、学生自身の理解度把握に役立っている（添付資料5）。

また、小テストにAzaMoodleを使用することで、受験後すぐに正答や簡単な解説を確認できるようにし、理解不足や疑問を持ち越さないようにしている。さらに翌週の講義ではLMSで呈示するよりも詳細に小テストを解説している。

(2) 学生の理解度の把握

A

LMSを用いた小テストは、同時に教員が学生の理解度を把握するためにも利用でき、その小テストの正答率から理解度の低い項目をピックアップし、翌週の講義時冒頭の復習時間にその項目を重点的に解説するようになるとともに、講義の進行速度を調節している。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

これまでの授業アンケートで復習を行っている学生の割合が低いことが判明したため、一部の科目で翌週の講義初めに小テストを実施し、小テスト対策として復習を促すよう変更した。この科目では、受験から正答の確認、解説までシームレスに行えることから、学生の理解度も高まっているようで、想定よりも定期試験の不合格者が少なかった。

一方で、定期試験では選択問題に対して記述問題で大幅に得点率が低い状況が見られたため、より深い理解とその有効なアウトプットを学ぶために、課題に対するグループワークと発表などの機会を設けたい。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

(3)に関連して、小テストを講義最後に行うと時間を取り難いためか質問する学生が少ない傾向がみられ、講義初めでの小テスト実施科目では講義後に時間的余裕が生まれて質問する学生が多い傾向があり、その回の疑問点がある場ですぐに解決できるメリットは大きいと感じた。しかし、単位数によっては小テストを講義最後に行うメリットもあるため、どちらの時間帯が良いかは総合的に判断したい。

(5) 双方向授業への工夫

B

動物栄養学実習では飼料の栄養成分分析を主に扱っているが、実習項目ごと（実習2～3回に1回程度）に得られた結果の妥当性や飼料の種類による違いなどについて、班単位で教員とディスカッションする機会を設けている。この科目は選択科目かつ4年次配当なので履修者は少ないが、内容に興味を持った意欲の高い学生が履修していることもあって、教員との対話が考察をより深める機会となっており、その点は授業アンケートでも学生から評価されている。

上記科目は履修者が少人数であることから効果的な双方向授業が可能であったが、履修者の多い必須講義での展開は、課題に対するグループワークと発表など効果的な方法を検討する必要がある。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

獣医学科の担当科目は多くはないが、その中でも獣医畜産管理学では、乳牛の栄養生理ということで国家試験によく出題される栄養に関わる周産期疾病について解説している（添付資料4）。本科目は3年次配当の科目であるため、基礎的な栄養学の知識と臨床的な知識がリンクするような講義を心掛けている。

獣医保健看護学科では、栄養学が動物看護師の重要な臨床業務の一つである飼主への栄養指導の根底となる科目であることから、単なる疾病ごとの療法食の使い分けにとどまらず、各疾病の病態において栄養がどのようにどの程度関わっているのかを講義で丁寧に解説するよう心がけている。栄養指導の背景にある病態と栄養代謝の正しい理解は、国家試験対策としても重要である。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

動物栄養学の講義資料について、重要な事項や語句を穴埋め式にして欲しいとの要望があった（添付資料5）。その背景には自身で書くことで記憶に定着しやすい、講義に集中できるということだったが、一方で講義資料は全て記載されたものに講義時のメモを書き足したいという学生も多く、両方の形式を用意することとした。他の科目でも同様に対応している。また、LMSでの小テストでは問題や解説がその場限りでしか閲覧できないため、講義中に学生からの希望もあり、小テストの解説集を別途用意した（添付資料4）。小テスト解説集は、講義終了後ではなく、数回終了した毎に分割して提供し、試験対策としてではなく、日常的な学習に利用できるよう配慮した。

また、講義は毎回録画し、講義後1時間以内にはAzaMoodleにアップロードしている。講義動画を速やかに提供することで、聞き逃しの確認やノート整理など復習の機会を逃さないよう配慮している。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

講義資料については、自身の勉強方法に合わせて資料が取捨選択できるようになり、資料を活用しやすかったと毎年のように評価されている（添付資料5）。小テストの解説集については、分割して早めに提供したことで日常的な学習がうながされたのか、一部の科目では不合格者が減少した（添付資料6）。録画した講義動画の速やかな提供は、聞き逃しの確認やノート整理など復習に役立っているとのアンケート結果を得ている。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

今年度は、講義時間の長短（1単位か2単位）により小テストの実施方法（講義初め、あるいは終わり）を変更した。その組み合わせは概ね適切だったと感じているが、来年度も引き続きこの方法で問題ないか検証したい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

上述した講義資料の改善や小テストの実施といった授業改善の取り組みにより学生への講義内容の定着や復習を促すことに取り組んでいる。

また、定期試験で選択問題に対して記述問題で大幅に得点率が低い状況が見られたため、より深い理解とその有効なアウトプットを学ぶために、課題に対するグループワークと発表などの機会を設けたい。

一方、講義の出席率が低い学生は単位取得率や定期試験の得点も低い傾向があるため、LMSを利用した出欠確認だけでなく、カードによる対面での出欠確認を併用して講義出席への動機づけを図っている。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

特にこれらの取り組みを積極的に行っている栄養化学では、不合格者（単位未修得者）が2021年度8%、2022年度6%、2023年度5.7%、2024年度3.7%と年々着実に減少している（添付資料6）。

2025年度は、学科新設やカリキュラム変更に伴って新規科目や担当を外れた科目が多かったため、継続的な評価がし難い側面があったが、これまでの経験から新規科目においても4.および5.で述べた授業改善策は概ね機能していると考えている。（次年度以降、単位取得状況などを基に精査していく。）

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

学内で開催されたFD研修会（ティーチング・ポートフォリオ作成につながるブラッシュアップ研修、教員相互の授業参観など）に参加して、他の教員との意見交換や講義方法の工夫などの知見を得た（添付資料7）。特に授業参観は普段の講義を垣間見ることができ、話し方のテンポや学生を注目させるポイントなどを目の当たりにすることができ、収穫が大きかった。その他に、ICTを活用した双方向授業、アクティブラーニングに関する書籍（添付資料8）から講義のヒントや知見を得た。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

これまでに改善した授業形態（小テストや講義冒頭での前回要点解説等）を活用した双方向授業への取り組みを進めていきたい。具体的には小テストを満点となるまで複数回受験出来るようにして繰り返し学習することを促し、教員が作成した「問題」に対する「解説」をレポートとして課して理解を深めてもらったり、より深い理解とその有効なアウトプットを学ぶために、課題に対するグループワークと発表などの機会を設けるなどして、定期試験だけでなく継続的な学びを提供できるよう目指したい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

添付資料1「シラバス」、添付資料2「講義資料・小テスト」、添付資料3「小テスト結果集計表」、添付資料4「講義資料」、添付資料5「授業評価アンケート」、添付資料6「成績評価一覧表」、添付資料7「FD研修会資料」、添付資料8「参考にした教育法に関する書籍一覧」